

認知症高齢者の世界観

—「時間」と「空間」の視点から—

林 眞 帆

【要 旨】

本稿は、日本生命財団高齢社会実践的研究助成を受けて実施した研究の成果に依拠し、滋養的環境の中で生きる認知症高齢者の世界について、C. ジャーメインの生態学的視座をもとに「時間・空間」の側面から考察した。結果として、認知症高齢者の生きる世界は、過去・現在の時空間を往還しながら生を育む本人とそれを支持する滋養的環境の存在によって形成されていることがわかった。

【キーワード】

認知症高齢者、相互作用、環境、時間、空間

I はじめに—研究の背景と目的

近年、高齢者の抱える課題は益々深刻化し、本人のみならず家族の生活にも大きな影響を及ぼしている。2000年に成立した介護保険制度は、介護負担を軽減したもののサービス提供の基準が身体機能の評価に焦点化され、人間の暮らしが軽視されている点は否めない。特に、認知症高齢者においては診断や治療が先行するあまり、身体機能中心の医学モデルが軸となりケアが展開されている状況がある。それゆえ、中核症状や周辺症状から判断され、彼らの語りや行為によって示される主体性を問題行動としてのみ捉え、当事者の権利侵害が起きている事象もある。

一方、認知症高齢者を対象としたソーシャルワーク研究については、当事者を中心とした研究が盛んに行われている。なかでも認知症高齢者の生活関与観察から実存的理解の重要性（大和田：2010）や、当事者論からのケアのあり方（天田：2004）、本人らしさを重視したケアのあり方（T. Kitwood：2005）など、認知症高齢者の本質的理解にも関心が高まっている。実際に T. Kitwood の提唱するパーソンフッド（その人らしさ）を中心としたケア論は、研修教育を基礎に、現場での介護実践が進められている。これらの研究に共通してみられるのは「当事者の側から理解すること」を通して、対人援助の本質である「価値」を基盤にした援助のあり方を明らかにしようとしている点である。反面、いずれの研究も当事者の語りや行為と環境との関連性については十分にはふれられていない。

そこで、本研究は認知症高齢者を「当事者側から理解する」試みとして、「認知症高齢者が生きる世界」が時空間と環境との間でどのように織りなされているのかを明らかにすることを目的

とする。理論的背景として、生態学的アプローチに依拠する。本アプローチが生活空間や時間的経過をとおして人間と環境が相互に影響を与えながら形成していく力動的過程（久保紘章他：2005）を重視するという観点から、本研究では認知症高齢者の生きる世界を「時間」「空間」の要素から分析し、認知症高齢者の生きる世界の構造を明らかにすることを試みる。

II. 研究の視点と方法

本研究は、ニッセイ財団の助成金を受けた共同研究¹の結果に依拠し、その結果である①認知症高齢者が暮らしの行為者として主体的に現実世界を生活している存在であること、②主体である本人は他者（環境）との社会関係の中で生活していることの2点を前提とする。

分析対象は、安定した社会関係の中で生活していると結論づけた認知症高齢者5名と援助者によって記録された逐語記録とする。5名の選定理由については、安定した社会関係の中で生きる当事者の世界を見ることで当事者の暮らしが何によって滋養され豊かになるのか、より鮮明化すると考えた。また当事者の語りである逐語記録を分析対象にすることで本研究目的の実証性が担保されると考えた。対象者5名の属性は表1のとおりである。

研究方法は事例研究とする。事例研究は、事例の特徴や変化のプロセスについて総合的かつ力動的に分析・検討し、それにより得られた知見を臨床的・学術的に活用することを目的とする研究方法である。また、具体的には状況を把握し、課題の原因や影響とそれへの対応を分析するものであり、これまで十分な研究がなされていない領域での理論生成を目指す本研究において有効であると考えられる。今回は、分析対象が認知症高齢者の語りや行為であることから、データに多様性があると予測できる。そのデータに表れる事象を縮約せず、丁寧に解釈学的に分析を試みることで認知症高齢者が生きる世界がより、鮮明化すると考える。5事例全体をとおして考察する。

表1

	性別・年齢	機能	
A氏	男性・81歳	要介護度4 認知症自立生活度Ⅳ	入所
B氏	男性・85歳	要介護度4 認知症自立生活度Ⅲa	通所
C氏	女性・76歳	要介護度1 認知症自立生活度Ⅲa	通所
D氏	女性 92歳	要介護度1 認知症自立生活度Ⅲb	通所
E氏	女性・83歳	要介護度2 認知症自立生活度Ⅱa	通所

III. ソーシャルワークにおける「環境・時間・空間」

1960年代に入ると伝統的ソーシャルワークの一つであった医学モデル（問題を状況よりも個人がもつ病理の反映として捉える）に代わり、問題を「人間」と「環境」の相互作用の結果として捉える生活モデルが登場する。このパラダイム転換を具体化する方法の一つとしたのが生態学的アプローチである。このアプローチは、人々の複雑に絡み合う生活事象を紐解き、問題を明確化し解決へと導くうえで重要な理論として認識され、問題やニーズを生活全体からとらえ始めたソーシャルワークに大きな示唆を与えるものとなった。また、このアプローチの登場の背景に

は、ゴードンが一般システム理論と人間の潜在的可能性に着目した点にある。「人間の変化の可能性」(T. プトゥリム：1986)という価値は、人間の潜在的な能力への深い信頼であるが「変化する存在」としての人間理解について、C. ジャーメイン(1992)は、人と環境の視点から生態学的変数として「時間」と「空間」に着目した。ソーシャルワークの歴史において、時間の本質に注意を払った理論家はほとんどいない(C. ジャーメイン：23)点において、C. ジャーメインの理論はソーシャルワークに大きな影響を与えたと言える。

実際に、個人・家族・組織・社会などは、独特な時間の有様をもち、人々の価値とライフスタイルに影響を与える(C. ジャーメイン：24)。その観点から、生態学的アプローチは、人間と環境の時間的行動を理解することがクライアントの問題やニーズに接近し、新たなサービスを創造できるとして人間にとっての「時間」の重要性を示した。同時に、「時間」を「生物学的」時間、「心理学的」時間、「文化的」時間、「社会的」時間の4つに分類し、環境と時間の経過(生活時間)の関連から人間存在の理解を試みている。また、時間の把握の仕方について、直線的な時間の把握は過去の経験が現在や未来を支配するという決定論的な考え方に繋がると批判し、人間と環境(人と社会)の中で起こる交互作用的現象として「時間」を捉えることが重要であると述べている。

つまり、ソーシャルワークにおける「時間」とは、クライアントの「個人的時間」と「社会的時間」の中で生きる人の「生活過程」であり、多様な環境と関連しながら、蓄積した自己が存在するものであると捉えることができる。これにより、ソーシャルワークにおける「時間」概念は、問題の解決を図るうえで、蓄積された時間の中にその人らしさの存在を認め、創造的適応や成長への可能性があるという援助観を導いた。

また、C. ジャーメインは生態学視点における人間について、環境によって影響を受ける存在であると同時に、環境修正(C. ジャーメイン：102)とう概念を用いて環境を変えることができる存在であるとしている。環境については、一般の生態学という環境概念を比喩的に使用しながら、人間の生活全般に影響する環境について説明している。例えば、物理的環境は「人々が相互に影響し合う場の物理的属性」であり、社会的環境は「人々の相互作用を操作するアクション・システムの活用や活動の参加、または規範・規則などから成り立っている構成物」(C. ジャーメイン：54)と定義し、この物理的環境と社会的環境が相互に時間や空間の中で交流を繰り返し、人間の営む生活や活動から文化形成していくと理解されている(久保絃章他：128)。そして、同様に生態学用語から環境に影響する重要な概念として、生息環境と生態的地位をあげ、人間も自らの居場所を守るために見えない境界をつくりながら、私的空間(個人空間)を生み出していくとしている。つまり、環境とは、それらが存在する「空間」と一体的に捉える必要があり、環境との相互作用により私的空間は左右され、生活の質にも大きな影響を及ぼすと理解できる。

具体的に人間の生活に及ぼす空間を「対人空間」、「特別な空間」、「秘密の空間」、「私的空間」、「社会的空間」などに分類し、人々が物理的空間の中で行うことは、単なる「空間」(Space)から「場所」(Place)に創り上げていくことである(C. ジャーメイン：54)。言い換えれば、創りあげられた「場所」は、クライアントの「生活空間」として自己が刻まれる場であり、自らのアイデンティティや自律性、社会性などが生まれ、尊厳が強化される場であると言える。

そもそも、「時間」とは、「空間」とならび事物が継起する基本的な枠組みを据える概念である。また、「時間」は、根本的な連帯性が空間との間にある(E. ミンコフスキー：21)。それゆえ、「時間」と「空間」の交差点にクライアントの主観的世界(大和田：42)が存在すると整理できる。その意味で、人間の「生きる世界」「生きてきた世界」には時空間によって積み重ねられた人間の本質が存在すると言え、その世界を読み解くことは当事者側から彼らを理解することを可

能にする。

IV. 研究結果と考察

1) E氏事例にみる認知症高齢者の世界

【ケースの概要】

83才、女性、独身。要介護度2、認知症日常生活自立度Ⅱa。A施設のデイサービスを利用中である。一年前に夫は他界しており、現在、一人暮らしをしている。別居の三女が主たる介護者である。本人は、亡父と二人暮らしをしていると認識している。認知症状は物忘れ、短期記憶障害が顕著である。

本事例は、過去の記憶を中心に語る場面が多い。そして、過去の時間や空間を想起させるきっかけとなるのが、「誕生日」や「お花見」という現在の時間と空間である。E氏の語り(表2)には、これら「時間」と「空間」が刺激となり語り始める場面と、すでに本人の中で設定された家族(亡夫、末息子)との出来事とおして語られる場面の二つの場面がある。

①の場面では、本人の誕生日という場の設定に対して、職員が意図的に過去へ誘うことにより、本人の主体的な語りを導き、穏やかな「時間」と「空間」が創設されている。また、②の場面では花見の席で自然に出たおぼろ月夜の歌に子ども時代に思いをさせ、花見という場を設定した職員との間に「あんたのおかげ」と感情共有の時間が流れている。E氏の語りの中で唯一③場面のみが、現実を語っている場面である。居心地のよい「空間」で安心できる人たちとの「時間」の中で、本人の確かな心が呼び戻されている。

また、本事例には、過去と現在が同居し、その時空間を往還する本人の姿が見える。④の場面では利用者S氏との会話から亡夫の食事の準備を思い出す。「早く帰って食事の準備をしないと」ならない」というS氏の語りに対して「それは大変だな」と共感し応答するS氏という環境が存在する。また、⑤の場面では、E氏にとってここは「ほっとする場」で家族の世話からの解放感が得られる重要な場として認識されている。

言い換えれば、デイサービスという新たな場が本人の話を職員や他者が何も言わず聞いてくれる空間(場)だからこそ、本人にとって安心や安定をもたらす。無条件に自分を受け入れてくれる他者の存在が、本人に喜びや安心感を与え、通所の場が穏やかで温かな「空間」としてかけがえのない場所になっているとも言える。また、そのかけがえのない場が機能訓練によって不満を抱える場となった場面⑥において、本人にとっては不本意なプログラムではあるが、職員の「家にいると忙しいから、みなさんとゆっくりしましょう」と本人の理を理解する環境と応答の存在によって「大丈夫よ」と自らで納得のいかない環境へ適応しようと動き出す様からは、本人の潜在的可能性を見出すことができる。この状況は、一般に喪失の時代を生きるとされる認知症高齢者が変化・成長することにより自らの居場所を創設していることを物語っている。

以上のことから、過去と現在の「時間」と「空間」が往還する認知症高齢者にとって、ほっとできる「空間」(場)と肯定的にかかわる職員や自分の話に耳を傾け共感してくれる他者と感情共有ができる「時間」の中で、本人の主体性が発揮され、新しい世界を創造している。つまり、認知症高齢者の生きる世界は、「時間」「空間」「環境」との相互作用によって構成され、その質が暮らしの豊かさを左右すると言える。

表2 語り記録データ

①	<p>【状況】施設到着後、2日前におたん生日（3/10）だったE氏に、うまれた頃のお話をスタッフが聞いた時…</p> <p>【具体的な語り】E氏「私の生まれた時は、安産だったらしくて、名前もお母さんからもらったのよ…」と、昔の思い出話をおだやかな表情で始められる。E氏が語り始め、CWrB、SWrAがゆっくりと話をきく。留めどなく、お話がつづき、お母さんはどんな人だったか、兄弟のことなど質問すると、くわしくこたえてくださる。「お兄さんは身体が弱くて…」と少々悲しい顔になったため、SWrAが別の話にふると、またおだやかな表情に戻り、変りなくすごされる。</p>
②	<p>【状況】七瀬公園へお花見に行き、菜の花を見て、みんなで（E氏、S氏、SwrA、CwrB）自然と歌（おぼろ月夜）が出たとき…</p> <p>【具体的な語り】E氏もつられて、「♪菜の花畑に……」と歌をしっかりと2番までおぼろ月夜をおだやかな表情で歌われ、「尋常4年生の頃学芸会で発表したのよ」「なつかしいなあ…あなたのおかげで…」とSwrAに語りかける。SwrA「こちらこそ、ありがとうございます。おかげで楽しかったです」とお礼を言うと、お互い笑顔で手をつないで歩いていく。</p>
③	<p>【状況】午後、みなさんと足湯をしてリラックスしている時、E氏と利用者S氏の会話の中で（家族の話のようである）</p> <p>【具体的な語り】E氏：「三女の○子が一番私によくしてくれるんよ。毎日来てくれるんよ。あの子のおかげで私は幸せでいられる。」とS氏に話される。おだやかな表情であった…。「1人暮らしでもさびしくない」とのこと。S氏はお話の聞き上手で「あなたは子どもさんがよくしてくれてから幸せだね」と共感して下さっている。とても良い雰囲気足湯をされる。（職員の解説：いつもは、自分は「1人暮らしではない。（亡くなった）ご主人と2人暮らしだから、娘は嫁いだからめつたに来ないんよ。」とおっしゃられるE氏。 実際、三女の○子さんが毎日来てくれている。</p>
④	<p>【状況】E氏が別の利用者S氏と、御家族の話をしていた際、…</p> <p>【具体的な語り】（本当はご主人が亡くなっているが、…）E氏「早く帰っておとうさん（夫のこと）の食事の準備をしないと。」と話される。（おだやかな表情で…）話の聞き手であるS氏が「それは大変やなあ…」ときづかって下さる。その場にいたCWrBは話を否定せず、そのまま話をきいていた。その後は特におかわりなく、ひなたやのメニューをすごされ、いつもどおり帰宅される。</p>
⑤	<p>【状況】午後のティータイム時、U.T氏とS氏（別の利用者）CWrA、SWrAで談笑中。</p> <p>【具体的な語り】E氏「ここはほっとするなあ…家にいると忙しくて…」と、S氏とCWrA、SWrAにかたりかけられる。（笑顔で）S氏、CWrA、SWrAともにとくに否定せずお話をきく。SWrAが「Uさん、家にいると食事のことや、そうじて忙しいのかな？」ときくと、E氏は「おとうさんや子どもがいるからね、…」と笑顔でおっしゃられる。その後も変わりなく、おだやかにすごされる。</p>
⑥	<p>【状況】お昼前のみなさんと機能訓練中</p> <p>【具体的な語り】E氏「ここでぐらいゆっくりすごしたい。家にいるとき忙しいのに…」とCWrAに疲れた表情で語りかける。SWrAが「家にいると忙しいからみなさんとゆっくりしましょう。きつかったら、お休みしますか。」と聞くと、E氏「大丈夫よ」と引き続き機能訓練を始める。</p>

2) 認知症高齢者の生きる「時間」と「空間」

5事例の分析から認知症高齢者が生きる世界を私のおよび社会的な側面から表3のように整理した。認知症高齢者の私のおよび社会的な「時間」と「空間」は、E氏の事例からも理解できるように生活空間で起こる成長や発達、変化の時間として捉えることができる。そして、認知症高齢者もまた社会的な時空間の中で、個人的な時空間を生きる存在である。

具体的に生活空間には、入所や通所という社会的空間となじみの場【暮らしの場】という私的空間が存在する。フォーマルな場は、介護保険制度によって予め設定された【制度的時間】（社会的拘束時間）によって制約のある空間として設定されているが、職員や利用者との社会交流の場【コミュニティ】には親密な他者と過ごす【滋養的時間】が存在する。つまり、滋養的時間は、社会的空間である新たな場に認知症高齢者が適応を図る私的時間でもあり、社会的「時間・空間」と私的「時間・空間」が交差し、相互作用を螺旋的に繰り返しながら認知症高齢者の生きる世界が構成されている。

表 3

時間		空間 (場)	
私的時間	社会的時間	私的空間	社会的空間
滋養的時間 ・生活時間 ・余暇時間 ・自由時間 ・主体性が育つ時間 ・生活再建時間・生活 変遷時間 (ライフトランジション) ・生活適応時間	制度的時間 ・社会的拘束時間 ・環境の変化する時間 ・安全が確保された時 間	暮らしの場 ・親密な他者、重要な 他者との場 ・居場所(馴染みの場) ・意思決定の場 ・安心が確保された場	コミュニティ ・社会交流の場 ・制約のある場 ・マクロ (行政) ・フォーマルな場 ・インフォーマルな場 ・安全が確保された場

3) 滋養的環境における相互作用

生活モデルが基礎に置いた生態学視点とは、生物有機体は環境と不可分な関係であるとみなす生態学、文化人類学、社会心理学、行動科学など幅広い知識や理論に依拠している。特に、生物有機体が種の保存と個体の生存を目的に様々な環境の中で自らの力で環境に「適応」し、環境を「変化」させながら生息している点から、人間も生活時間の中で多様な環境との間で相互作用を起こしながら、「適応」「発達」「変化」する存在と考えられた²。この点に着目した生態学的アプローチの最終的な目的は、人間の潜在的可能性によって「滋養的環境」を創造することにある。

5事例の特徴を整理(表4)すると、認知症高齢者と環境との相互作用が確認できる。安定した認知症高齢者の暮らしは、環境との応答的かつ支持的な社会関係で構成されている。特に、認知症高齢者の語りは、「今」の出来事を過去に存在した人や過去の経験に基づき苦悩する反面、折り合いをつけようと生きている姿を映す。B氏の場合、過去の働きものであった自分と「一人では何もできない、人の世話になる私」との対比から苦悩や葛藤を抱え介護拒否をする一方、G氏のように過去に「あなたは幸せもの」と評された記憶が、介護が必要な状況になっても、自らを「幸せ者」として折り合いをつけていく。つまり、苦悩や葛藤する場に支持する環境が存在するか否かによって安定が左右されると言える。

また、安定した世界には、「今」を生きるために必要な「重要な他者」「親密な他者」が存在し、「時間」と「空間」を応答的・支持的に共有することで、安定した暮らしを導き、維持させている。C氏は、なじみの関係である利用者(親密な他者)が不在となると、認知症高齢者にとってデイサービスの場は途端に空虚な場所となり、時間さえも静止する。楽しみにしていたデイサービスという「空間」も、そこで過ごす「時間」も意味のないものになってしまう。つまり、「空間」や「時間」は応答する環境の存在があるからこそ、暮らしに意味をもつ。それは、葛藤を抱えながらもそれを回避しようとする認知症高齢者の生への試みであり、そこに主体的に「安定世界」を形成する姿が見える。

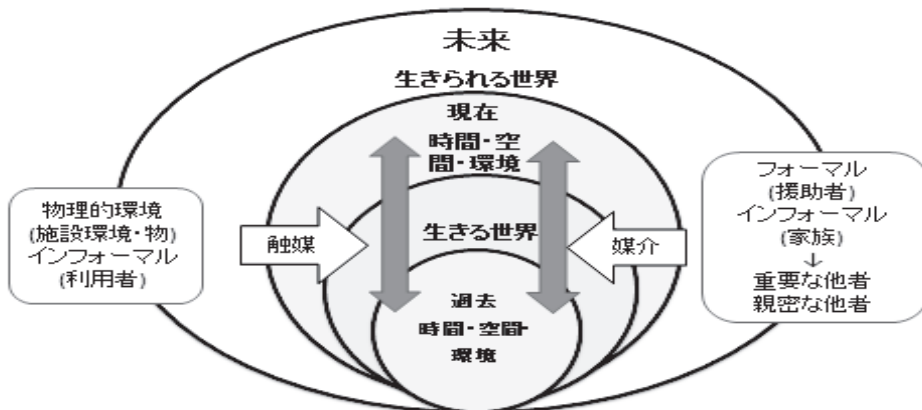
一方、物理的環境やインフォーマルな環境(利用者)によって誘発され、過去の環境が出現することがある。記憶の薄れゆく現実世界の中で、生きていくために過去の人・物・場所・時間が登場し、暮らしを安定に導くこともある。A氏の場合、音楽(物理的環境)に誘発され、過去の役割(放送部の顧問)が表出し、他利用者を学生と化し、レクリエーションの時間が部活動の場に変化する。また、E氏は送迎中に運動会の飾り(物理的環境)を目にすることによって、子どもの運動会を思い出し、認知症高齢者の生きてきた歴史が現実世界と重なり合い、郷愁混じりに幸せなひと時をもたらしている。このように過去世界を想起させる物理的環境は、認知症高齢者に満たされた「時間」と「空間」を与える。

表 4

	事例（社会関係）の特徴
A氏	妻と離れて暮らす境遇が苦悩や葛藤をもたらし、不安定さの要因になっている。しかし、援助者の行う「重要な他者」（妻）との関係維持への支援が安らぎを導いている。施設の中で過去の職業が表出するが、それが施設の中で一つの役割となり、他の利用者との摩擦を回避している。つまり、主体性や柔軟性をもって良好な社会関係の構築を図っている。
B氏	「一人では何もできない」自分を認識せざるを得ない状況に葛藤しつつも、援助者との円滑な援助関係が信頼を深め、援助者の存在が日常の暮らしを明るく楽しいものにしていく。本人と環境を円滑につなぐ媒介者として援助者が存在している。
C氏	デイサービスという場において、本人から積極的に他の利用者に働きかけることによって自らで「居心地の良い場」に変化させている。与えられた環境の中で、主体的に関係形成を図っている。親密な他者（利用者）の存在が本人の世界に意味を与えている。そして、親密な関係を「紡ぎ、繋がる」ことが社会関係の一つのかたちになっている。
D氏	孫や娘との良好な社会関係が土台となり、他の利用者との会話が円滑なものになり、新しい社会関係の形成が円滑に図られている。 老いに伴う不安や負い目に対して、周囲から「幸せ者」として言われていることを思い出し、折り合いをつけようと試みる。また、元気な頃の記憶が老いへの苦悩や孤独の論拠として存在している。
E氏	亡夫との温かな記憶が他の利用者を亡夫と見立てることで、夫とともに施設で生活していると認識させ、暮らしに安心や幸福感を導いている。しかし時に、主婦としての役割からくる負担やストレスが表出し、不安や悲哀を表出させる。過去の記憶と現実を往還することで、今の暮らしが支えられている。また、援助者や家族がそれを否定することなく、繋ぎ合わせることで今の暮らしを豊かなものにしていく。

認知症高齢者が現在と過去の往還しつつ、創られる意味世界は、「重要な他者」や「親密な他者」が過去と現在を媒介し、社会関係を「繋ぎ」、「紡ぐ」ことによって成立する。認知症高齢者の生きる世界は、現実には一般的には了解不可能な部分が多いうえ、取り乱す行為でしか存在の安定を保持することができない場合もある。それゆえ、＜安定世界＞となっている認知症高齢者の暮らしは、環境が媒介的機能を果たし、「一人ではできない」認知症高齢者の語りや行為の意味を解釈し、理解し、応答する機能によって成立している。また、前述したような運動会の飾りや音楽など物理的環境は、時に触媒となり認知症高齢者の暮らしに彩りを添える。

図 1 認知症高齢者の生きる世界



以上のことから、認知症高齢者の生きる世界は、過去・現在が交差する「時間」と「空間」の中で生きている。しかし、その世界が混沌とした世界になるのか、生を育む世界になるのかは環

境によって左右されることがわかった。そして、環境が意味ある「時間」と「空間」を彼らに提供することによって、認知症高齢者は未来に向かって生きられる世界を手に入れることができる。また、5事例に共通してみられるのは、認知症高齢者が主体的に環境との相互作用を図り、周囲に明るさや笑顔をもたらしている点である。不本意な施設という生活の場は、時として管理される主体を生むが、多様なかたちで自己を主体的に表出することにより、自由を獲得するかのように見える。つまり、滋養的環境にある認知症高齢者の生きる世界は、認知症高齢者の主体的な語りや行為によって現在・未来という「時間」に向かって自らの居場所「空間」を創造する世界であり、それは、老い衰えゆく自己の豊かな生への営みを可能にしていると言える。

V. おわりに

本研究では、認知症高齢者は、認知症ではない人々と同様に他者との関係に生きる存在であり、現在と過去の「時間」と「空間」が交差するところで生きる存在であることがわかった。また、滋養的環境のもと時空間の中で織りなされる認知症高齢者の生きる世界は、本人の潜在的可能性を引出し、新たな滋養的環境形成により未来に向かって進む世界であることも確認できた。

上記の結果は、認知症高齢者を当事者側から理解することの必要性と、より良いケアへの手がかりを示したのではないだろうか。ただし、分析対象とした記録データは、研究者の記録ではないため援助者の視点や主観が混入し客観性に課題を残している。また、今回は生活が安定している者のみを分析対象としているため、認知症高齢者の生きる世界をすべて概観できたわけではない。これらの点については今後の研究課題としたい。

付記

本研究における調査研究は、日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、倫理的配慮を行っている。また、記録データや事例内容についても分析に影響がでない範囲において特定できないように加工している。

【文献】

- 1) 大和田猛 (2010) 「認知症高齢者ケアにおける実存主義ソーシャルワーク再考ーある認知症高齢者の生活関与観察を通して」『青森県立保健大学雑誌』11、41-59
- 2) 天田城介 (2004) 『老い衰えゆく自己の／と自由 高齢者ケアの社会学的実践論・当事者論』ハーベスト社
- 3) トム・キッドウェイ著 高橋誠一訳 (2005) 『認知症のパーソンセンタードケアー新しいケアの文化へ』筒井書房
- 4) 久保絃章 副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデルー心理社会的アプローチからナラティブまで』「第七章生態学的 (エコロジカル) アプローチ」川島書店、P123
- 5) C. ジャーメイン著 小島蓉子訳 (1992) 『エコロジカルソーシャルワークーカレル・ジャーメイン名論文集』学苑社
- 6) ソフィア・T・ブトゥリム著 川田誉音訳 (1986) 『ソーシャルワークとは何かーその本質と機能』川島書店
- 7) ルイーズC. ジョンソン ステファンJ. ヤンカ著 山辺朗子 岩間伸之訳 (2004) 『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- 8) E. ミンコフスキー著 中江育生・清水誠共訳 (1972) 『生きられる時間1』みすず書房
- 9) スーザン・ケンブ、ジェームス・ウィタカー、エリザベス・トレーシー著 横山讓、北島英治、久保美紀、

湯浅典人、石河久美子訳（2000）『人－環境のソーシャルワーク実践』

- 10) 日本生命財団高齢社会実践的研究助成研究成果報告書（1）「認知症高齢者の社会関係の交差分析による量的・質的評価研究－『暮らしの行為者』の視点からの哲学的アプローチ」2010年9月 p. 62－63
- 11) 日本生命財団高齢社会実践的研究助成継続研究成果報告書（2）「認知症高齢者の社会関係の交差分析による量的・質的評価研究－『暮らしの行為者』の視点からの哲学的アプローチ」2011年3月 p. 20－25

【注】

- 1 筆者が研究協力者として参加した日本生命財団高齢社会実践的研究助成（平成20年10月～22年9月）を受けた「認知症高齢者の社会関係の交差分析による量的・質的評価研究－『暮らしの行為者』の視点からの哲学的アプローチ」研究報告書（1）および（2）
- 2 ソーシャルワークにおいてはT. ブトゥリムの人間の「変化の可能性」、パールマンの「ワーカビリティ」、ホワイトの「コンピテンス」など、人間観を基盤とした代表的な理論やアプローチがある。